砂の祭典に熊本城

崇城大生ら制作

3日から鹿児島県南さつま市で始まる「吹上浜砂の祭典」に、昨年の熊本地震で大きな被害を受けた熊本城の砂像がお目見えする。復興支援を目的に、実行委員会が熊本市の崇城大を通じ、同大芸術学部の楠元香代子教授に依頼。研究室の学生や卒業生らが制作した。

砂像は高さ約3㍍、幅と奥行きは約2㍍。鋭い角度が特徴的な石垣や天守閣を再現した。卒業生で熊本市の彫刻家、東耕平さん(33)が中心となり、2年生1人、大学院生2人の計4人が泊まり込みで作った。

楠元教授は「熊本城は熊本県民の心の支え」との思いから、学生たちに忠実な再現を指示した。いつもは粘土を重ねて作るのに対し、砂像は砂の塊を削りながら制作するため、手順が違って難しかったという。

いったん完成させて熊本に戻ったが、熊本城の近くで育った東さんは「中途半端な城を見せたくない」と、その後も1人で通い、ぎりぎりまで細部の仕上げにこだわった。「砂像を見て城や熊本のことを応援してほしい。できれば来年も参加したい」と語った。

砂の祭典は、南さつま市金峰町高橋の「砂丘の杜きんぽう」で31日まで開催(8日は休園)。大小約100基の砂像が展示される。問い合わせは同市役所の実行委員会(0993・53・2111)へ。

熊本城の砂像の仕上げに余念のない東さん

2017年5月3日　読売新聞　P.27